∞∞∞

れをなぜあなたは自分にだけはそんなことが起らないと思っていたのか。
　このセネカの考え方が身についていたのだ。
　また「徒然草」のいつも口中に唱えている言葉も、わが心をしゃんとさせるに役立っているようだ。
　ー若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり、今日まで遁れ来にけるは、ありがたき不思議なり
　自分を力づけるのは、キリストでも仏でもなく、こういう言葉だ、言葉の中にある真実だ。

　まだ前にずっと命がつづいているような気がしていた時と、残り一年と限られた時とで、別に生きる心掛けに変ることはない。前々から、生きるのは今日一日、「今ココニ」の時空しかないとして生きてきた。これが生涯かけて文学をやって来て最後に得たものだ。生きるのは「今ココニ」しかないと覚悟すれば、先に時があるかないかは何の変りもないわけである。
　人の生きる時は「今ココニ」だけ、これは唐代禅僧のだれもが実行した生であり、ローマのセネカが言うところでもある。セネカはほうぼうで、自分はその日その日を最後の日として生きている、と言っている。あだな望みがその日まではと設定した可能な未来に時を合わせて生きているのではない。だからあと数年を仮に与えられても、それを辞退はしないが、その延長期間がどこで中断されても文句は唱えない、と。
　セネカの「ルキリウスの手紙」を部分訳しているあいだに出会った、この言葉に感銘し、自分もそういう心掛けで生きようと努めてきたのだった。今、その延期期間が打ち切られようとしている時に直面して、あらためてセネカのその言葉を心に言い聞かせる。
　セネカは、人生がどこで打ち切られようとも、わが幸福なる人生は何一つ欠けるものはないと言い切る。そして別の所で、幸福なる人生とは何かと問い、それは、
　ー心に不安がないこと、不動の内的な平安があることだ。
　と言っている。
　わが身に顧めて、そう言い切る自信があるかどうか。』
　セネカは、二千年前のローマの文人であり、徒然草は、鎌倉末期の随筆である。二千年前に「誰かに起こりうることは、誰にでも起こりうるのだ」と説かれ、徒然草の中に、「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり、今日まで遁れ来にけるは、ありがたき不思議なり」と書かれていたとは。最近、軽んじられる傾向にあるが、やはり、教養とは大切なものだ、と痛感した。「不動の内的な平安」とはほど遠い粗野な人間であるが、「人の生きる時は、今ココニだけ」は、私にも実行できる。「人の生きる時は、今ココニだけ」。
　この言葉が、私へのお年玉であった。

理事　井上 林太郎